繪本豐臣勲功記

二編

八

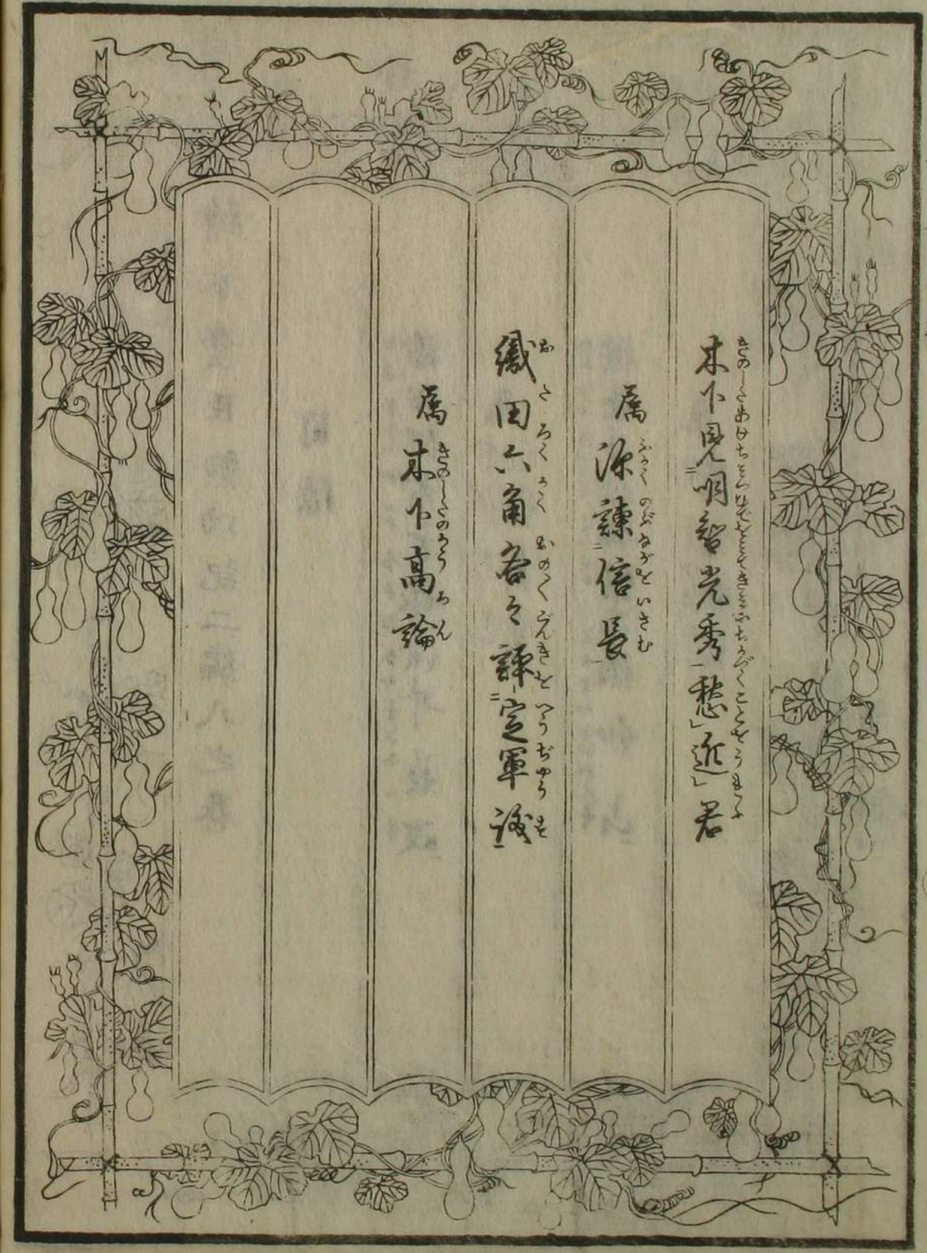
へ遠13
2209
18

特
へ 遠 仁
2209
/8

繪本豐臣勲功記二編八之巻

目録

織田阿市方嫁淺井長政
屬江儂義金書
信長長政組對面佐和山
屬秀吉救君



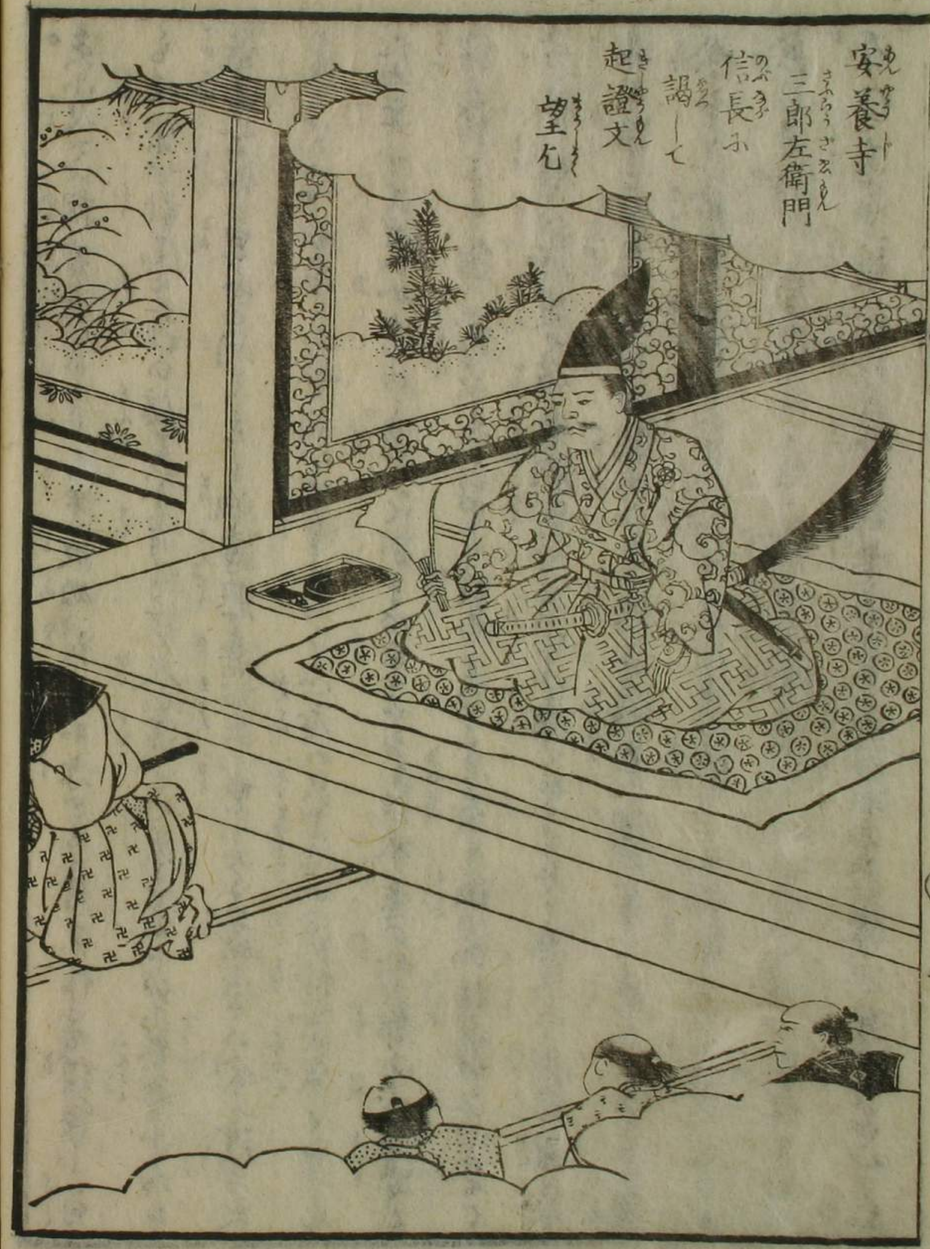
續本豊臣勲功記二編巻之八

櫻澤堂山　編輯

織田阿市方嫁淺井長政屬沢瀧義會

花ハ百日の紅あまたゞも人ハ千日ハ好やとハ宜なるうゑ茲ハ織田淺井の
両家好を結び中集を推たゝふ去ぬる永祿八年。木下ゞ勧めふゝうと上洛
の潔なまゝ淺井一家を。御業ハ人ゞんゞ悪うゝんとハ谷の長政中養書書
こ一部左衛門ハ内縁ある。不破河内守を使者として婚姻の話を謂收こう。然
ごも遠事調ひがたく不破本意ならくゝも迫り一月ゞ経て再び不破ハ門孫勝
助を添へ紀州ハ岩へ遣をされ。安養寺ゞ評ハ行て。婚姻の事を面ハ出ハ願ハ
しうがこ一部左衛門もゞごゞくゞハ谷の城へ出仕ハし再び美濃の信長こう使者
別乗のゝを吉草を勧ゝ。開も上総介信長ハ當時名誉の勇將ハ武威

を國に並び立て無に當る形を愬へて。後者あらしめんと望まるゝ緯。是ぞ信長近き内に都の地に將に登りて好松永の惡逆を鄰めんと謀ることを。聞て。此地を心安く通行せんことを。はからまさう。郡て信長の所行を見て國つまるる。天下の祀を改換め。右平に致さらん人こそ。信長の外あらざらめ。信長英雄に親を結び玉へん事。淺井家の大事と言ふべし。剛や當家を稱て。織田より娘を嫁らんと武門の面目こと。過ぎ。後世の笑話ならんべし。と勸めに。野守人の議。基の如きの程。油ぎ事を如く。信長近來屋濃を掌に收武器盛なり。ぬれば。遠天下に籠を拳。四海一統の功を達つき。大將と言ふべし。然ども越前の朝倉と織田とは代々不仮の間。信長は功を達。天下一統にならん。ふに必ず食を減ぜ。然ども故備前守殿 政景 朝倉家と盟約を。孫々まで別心を存ぜまじと誓ひ。詞をいふせん。向後織田家と朝倉家と弓矢に及ぶべ朝倉家は日本弓矢の故殿に對し。不孝ともなる。不信を讃べし。苟も後栄を計て。先祖の信義に背くこと。人の道とは言ふべ。ゆえに安養寺ふる遠事を仏と思ふと。向ても。遠藤喜右衛門尉ふる。強ふその家を理きこと。て作り。信長の婚姻を和望せらるゝ。心意は只上者の道條を心寧くなさんため。單ふを身の如きと思ふて。郡まで言ふ。本意の如く。都ふて漫々と。強あげしらんふは。當家もおのづから強ふとあり。底事も織田の指揮を受て。皆く方々の時ふ。定て信長朝倉とも。當ふ屬せんとせらるべし。朝倉原来織田家と。日本代不動の敵國なり。決して信長ふ後ふまじ。然ども。聞ふへ。德ふ。ふらで越前へ出軍をべき。淺井家こを諫ることも。信長いで所望のなさん。然ども。淺井 朝倉 とつふ。信長と軍をとも。不一口も勝ふらで。移ふ及んで。家一時ふ滅びん事は。朽憾ならざや。又信長ふ。の擁して。朝倉家を亡


安養寺
三郎左衛門
信長ふ
謁して
起證文
望乞

さん事ハ努々せざる處あり。唯今の御返答こそよくく後日の遠慮をめぐらし。志ゐるべしと諫めけるを安養寺こと帝在馬。偉然として所存ありしが久政の傷へ進言。詞を和らげて事をもつて。遠藤氏が志を忘れ、ど玉極のことゝりふ催へども。今朝倉の器とそのを信長を不和ふしとなまび亜地ふ當家ふ讐とあるべし。を晌朝倉力を勠て當家を援助ふ亡ど同じふたびきや。いまそもそも志りと量りがたく。又信長が而念ふ隨ひ緣をむすびらあるとも。彼人果して義を挙。天下を一統ときや否や。是ふ林と決めがたし。はんざるふ芳の事を六案じ。眼前ふ仇を招ぎるふいよ〳〵ふ係こも路らまでど今ふ量こそ信長ふまを。當家ふまを一列の大名ありとへども以づきう早く四海を平治。天子を守護しらん少い是武將ふ。そ大名の列あらざるを恥こそふいづきふまを武將のか紀ふ。後ゐんがあるべらざ是。

で御上を重んじ。朝憲ふ從ふの道をべし。夫を背て私をこらきをべ朝威ふ慢しじ。法度ふ違ふの罪を犯ととのふ。既ふ形り。武將としてふ王命ふ逆ふの疑ど謀罪をる事。原その職と重をべし。倘淺倉家事ふ速を。朝敵とのりこらん時ふ縱令ふ浅の誓紙ありとも。當家も共ふ朝敵ることハ。こゝろを名を汚蛮んや。穿僅ふ信ふ存ぜるを。いかゞ是人ぞる後日を弃て目前の安堵を計らん事好て弓矢を執家の御本意ふと存ぜるを。ゐるふ重ぶを信長の武勇を御ふ〳〵ふまを。軍法道ふ直きを勝とを。織田殿當家のこゝ矢をもを。嫁しめんとのふを。能をを。そ話。玉ふ。忠ふ通と重ふをべ。夫を背て猜疑心を。明しもせざる事ふ。ひ人の信義を。あふ人の心を破まるふり。世義絶ひゞ思さる。と事。憑ふ老臣ら。中島日向ち。磯野丹波ちゞこの三人。この義最稚ふらん。と勧めらるふ久政も強ふ理ゞと同心。を。然が信長ふ使ふる。

不破内藤小野面々ゝと両使を本丸（招宴）種々饗應の縁あり。貴寺と帝
方へ奏聞を専使ゝ。詞を仔細に惠示くゆ。不破内藤と（奇に清別）ものを遣さる。
偖不破内藤の面人に安養寺を同道して故京城（へも陣を進ぜ彩と言ふ）
なるべ信長大に喜悦せらるゝ。安養寺を召出し。諸方らゞ對面あるべ帝方を馳て。
這遣あるべ所使ゝ。あぐり。所懇切の所誠意久敬父子ゞ身に於て面目の至
こゝ過りなさゞ候。使所愛を惠を形るに聊人の心頼に難儀の一限作に
より。猶縁つらまつり作ゆ。宮僧その事を試に言ゆ。信長政の
祖父亮政。越前の朝倉と熟懇の義作て。永々の子孫ゝ迄に連に接合ふ
べきとの誓約を申し候。彼り。然るに長政所縁者とあり。更を親しくゆ生
ゆらせ所縁の強に双を武門の都助にあぐらん事。大慶に極に候（ども朝倉
と所當家ゝ累代より不快と累所候（へ朝倉の家滅さるゝと。浅井

ゆ進退窮らん事を思ひ。種く思慮つらまつり作。ゝ。あぐら這論（へ）と言ふ。
所たも右も命に随ひ事を料理作らゝんとゝ人の惠出候。と運を信長き
こゝゆ。備別の心底誠ふく。信義を守りゆゝ。条々を乗りて感心せり。
家朝倉と不快のまゝ。京都（へ）仇せ事も。然べゝん組の不快（へ）論
ぜゞ。今さゝ當りて双方とも小仁のとゝ恨を何とゝ代ん。朝倉を滅して。其地を
貪る心。信長苟も天下を蔑ゝ。生の罪をして。國孔に困むを救ゝんゝ。義を挙
て逆を伐。朝憲を挑んゞ。我意を恣に振ふ。私欲の剣ゝ。いつる遺恨の人に
ゝ。もせよ。其人朝廷の所為に忠を竭ゝ義
を立ゝ。乃士ゝを踏むべけんや。這旨を以て長政に安達せらるゝ。仇縁あり。
軽倉家に對ゝ。私の怨を達する信長あらゞと宣ゝを安養寺。
ゝ。ゝ。ゝ。

信長妹を
浅井長政に
嫁しそく
安行の
略議を
調ふ

まで帰おやく。伺ひ面ふせことふて作。君天げ下小所詰と拳さをさるふ晌朝倉と
御情ませ紀越いとく御縁相違なくんべ拳か布御謹と頂戴つるまつり久敬小
現せさく存下候。と念強く稟さとふ上徳外驅てと咲まをさるひ大ま史の一
言金渋ようも猶堅し。ちんで紙小賜ぶべくんや。然ごもを方小使士ま。仏
こもあるべしと命せあって承時小自公寮の謹文と。こ御左ま つ通牒さるまこるひ。
遠上遠心ま紀小於くハ不日小入輿せ名心ぐべし。ま事ま方小任さる同宜しく料
理と命出さる。こ命左ま つ大小歓び遠御謹を賜るうハ。久政安逸候べく長浪い彩
ひつて違心りふを思れもみるまべ。姫君御入輿の事小おいそいふ子淫分まで也純之
調成りふしたまつると信長の拵を書と。おし戴き。謝辞ふて法皇と退出ひを紀
小答へ紀返し。信長の口状ならびに拵紙とひどし久敬父ま小見せるまべ初ある
上ハ信長と縁者小ならを苦しくらまを。準備とあをところへ遠義去右ま つ

出来ふ久敬父ま小稟まをらく。信長拵紙と遣しを。朝倉小宿意ま しを調ふ
まをを遠く後日と考まをべ。拵紙も反古小ふりぬし。織田蓋世の勇将
ふれば。御の遺恨とおもふべ紀不存ハあらねども。義景原来小量小しを。大
事小謀くおを しまをべ。絶小ハ織田の機小違ひ弓矢小おゆび惟らをん是を
矢小ちをしを朝倉と謀せをんべふる。遠拵紙小も朝家へ対。罪ま紀
族小私の宿意をを まを信長ま ちを。とあるとふを所へふ。然べ浅井家新金
と家国小安危存亡と。共小きんとおぶ しあさべ織田小好を と結を を ふ縁
ふるを。織田小親しくふりを を。朝倉と寄ふべし。南蛮と拵を ふ撰議小似
ふりと。唯書を締むまをを。ハ敬小心と決し。聘合の縁小定まるまべ。
再び謀と調を着と紀を。ひて体小ふる。是小ふりて浅井家より婚賜の使者とを。
厚扱ふものを縁婚吉凶と渇と改阜へ賜れが信長小も殊小慌び使者と種ぐ

歎待ひさまを。そ年の卯月吉日。信長養女於市の方。今年廿二歳ふして。
近國に比双の美人。ゆり勝女も嫉妬体て。連く遣くと最艶しく。江列小谷城へ入
輿あり。されば浅井家ふも又婚姻の儀。古實也正し作法を重んじ。千秋万歳の
喜人さらふ。喜ばく聘儀調的せり。於市の方は相貌麗しく紀こと類言ふのあし。
殺小的月もこまふ面つば羞て雲ふ潜まもとべく。芳花もこまふ蕾ぶ晒ふ色と
美ふて蕾むふ似ふ。是ふ因て長政ふも。殺び愛ずる緯ふ多く。ふ顧ふ
唐せらることや。斯とふ賜ふ。其後新ふ方義昭君。美濃ふ動座の機会
ふしも。御饗應等丁寧ふして。藤川まで御送ふまして。ふ帰きと。新ふ
家ふ対ふ草へ御動座ましく。ふれば不日ふ上洛のもようふ。あり。まづ江列の地利
と見人ふのさふ見ふ長政ふ對面ふ。踏次のことども相談せ。とふ永禄十一年八
月初旬。使者をふて浅井家へ京遣しふる。ふ近日新ふ方義昭君御上

洛ふ。ふ。そ。ふ。ふ。ふ

て近寄ハ未だ只一個嶷々然たるのみ

信長長政父子對面佐和山屬秀吉教君

涅槃の佛語に精進とかや。復とかとハ實に秀吉の心魂なり。身に寸毫も怠慢なく親しきまこと戰國なりとぞいひける。心寧ろ驕奢や君を守護なるべき。

江州ハ廻く事ハ湖上の氷を踏に似たり。然れども永祿十一年八月七日。織田上総介信長。未だ已下の衆僅に百有五十人。江州佐和山ハ廻れども然る汝未だ下秀吉ハ要害深き雖士なれども。蜂須賀彦右衛門尉。堀尾吉晴。加藤孫六。福島市松。其外勇士達一千余人に指揮を傳ハ。情く地に寸歩を拾せ。番場醒井。柏原。摩針山。鳥居本。各々進退自在なる事ハ。まことに。の勢を推ぶ。時に。嘉吉を定め。伊勢に。

参まと伊部なせ。未だ思寄の量こそ。

まべ。頓て淺井家より遣ハ休息亭を。

の義式を行ひ。それより長政。

人伽ハ信長他國に出らるゝ。更に準備の体も。

供る駿卒の。百四五十の小勢なれば心底の量り。

つ。凡人ならぬ良將ぞと感伏の色。

寄せ。盞して餐應ある。織田徹酒宴の席なれば。

大小事を相談せらるゝ。近臣江南の六角義禎。

淀川將佐に。

此に。侍人。

信長。

小至る。

名譽の良將。

の城に入らせらる。初に淺井の家

。佐和山の

。長政信長を源徹に請。

。直に公方家所上洛の

。近臣の使者を遣しくる事なれば。

。淺井の長政を遣と。

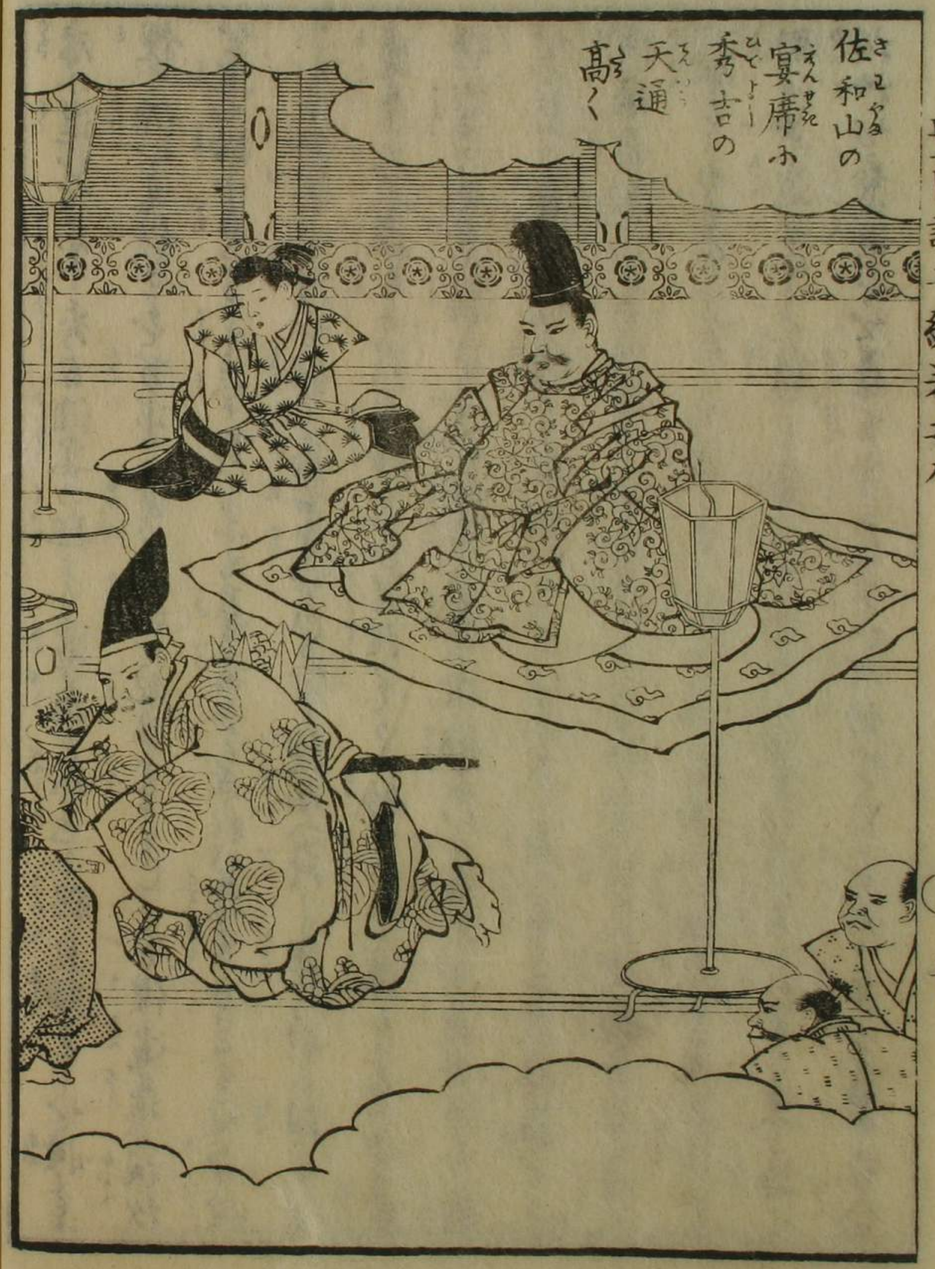
。次第に巡り。遠藤喜右衛門

。信長の相貌を窺ひ見。

。淺井と緩ぐませし事。謀の種と知らるゝ。

と好を結び義を全とする心意あるべし。彼此ともに結果来て来たることを
驚かず。信長を殺し。新公方家を小笠原迎へ。浅井の力をかりてこと好を
遂げし。京都の還御を祝成さんかの東代の名誉とまを過ぎと。俄頃に謀を
案じ出し。鴆毒を用ひんとおもひしが。長政が知らざるべしと。座を起出る
を伺待て。遠藤を諜合せが長政を兼引せば。信長平服して来陣ありし。
婚姻の好をなりへがり願を結ぶく毒殺せん緯武門の道とのふべうらを勇く遠
事思止ねと厳しく誡めらるべし。喜右衛門も宜しかるべく立るが又も密に思
ひ遠遣信長を殺さばんば。後日に必らず悔あるべし。從今さ人に辞さずとも是
を撃ん家國のためなり。果さずに止まじと思ひ定め。遠上に信長に走墓り刑殺さ
せやと心を変じ。短刀を懐底に忍持。機会を窺ふうち酒ふらちる四性が
長柄を眺と目屬て得計とを宛竟と四性を撥遣。喜右衛門御酌まゐらせんと発

席に進むを本に秀吉酒宴の緒より。遠藤が顔色に殺気を見しを
親て酒をも飲まぬ万事の首尾に眼を配りてをりしが。方便遠藤が柄杓
を把て酌にとるを挙動いろ〳〵もの常ならざれば藤吉郎こまを寄怪
ふおりひ突と座を起て喜右衛門ひろ〳〵顔面へ座〳〵塞り彼に詩〳〵や
遠藤大人老ゆとのひ牙神とのひ四性ぞうに酌せらまん緯おとなげなく覚
催に居こを年弱にて分相應の者に作。逃るをこのさへ御逆興あまと詔
とうけつ喜右衛門が持る柄杓をとらんとをるを否にをこを久政の使こを
御廳前へ出こまでも熱せる御歓待もつるまつらぬ切ては御酌ありとも仕り
一献をゝめまゐらせんとて。得こまつり起て候。その御詩酌をこゆ是下こを
敬注御近士にして。強も客人にておはしまべ僅に不仕せこゆへと注て
柄杓を奪返をを藤吉郎うち笑ひ御酌にこの四性女の年少の顔に死人の


佐和山の宴席ふ
秀吉の
天通
高く

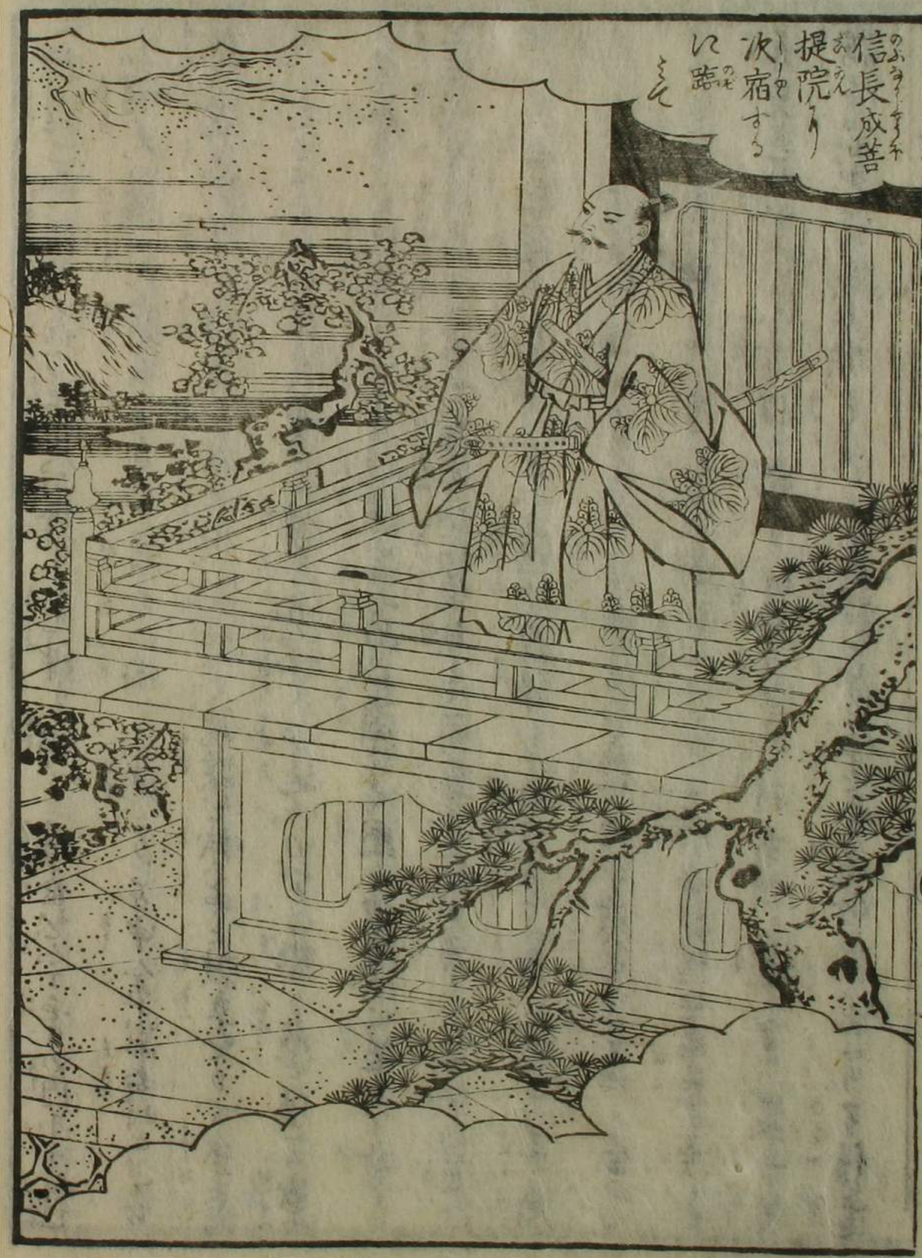
遠藤
喜右衛門
殺氣を
観破

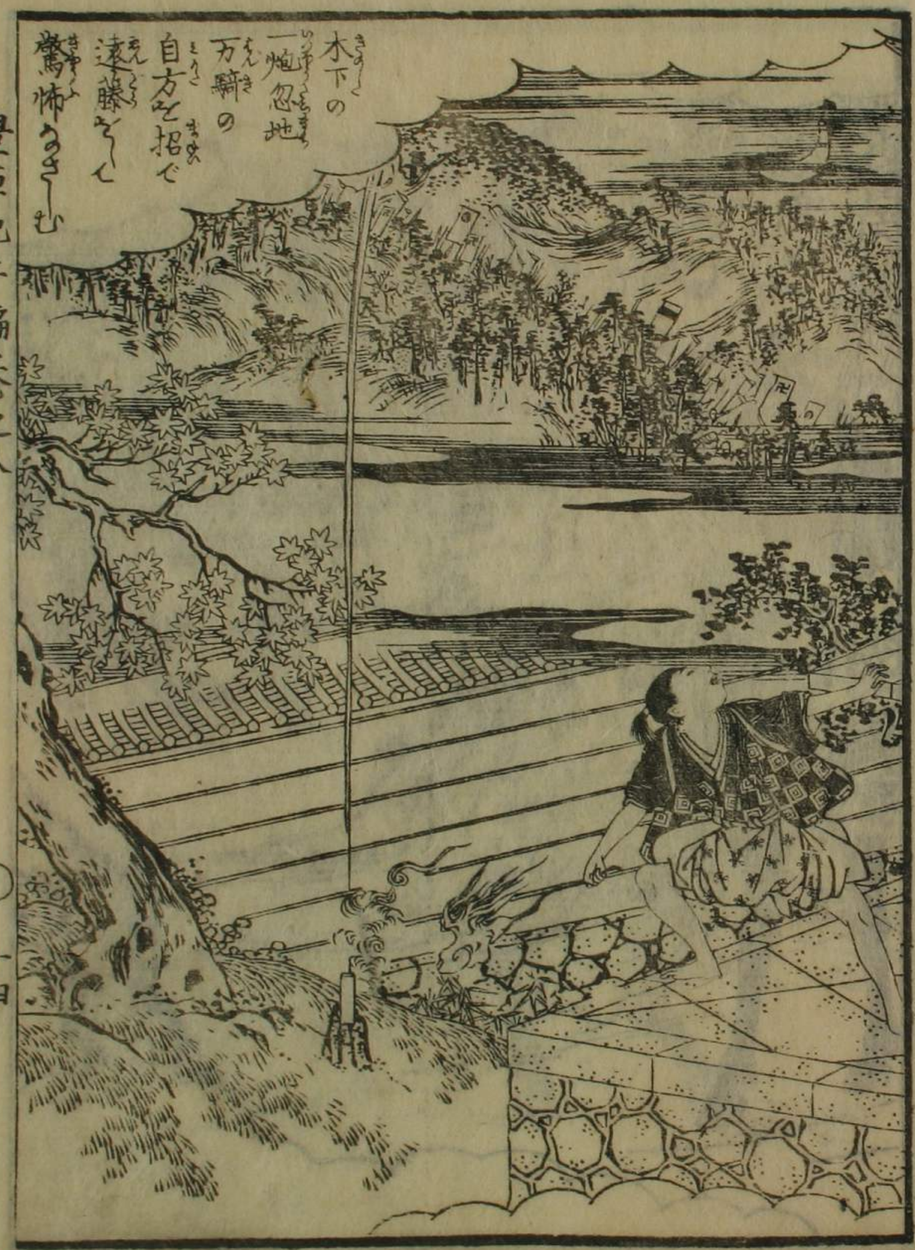
役あるべしとて引智足下の骨相象骸ふして異恵こまべ却て酒宴の興も覚ゆん縛漢の猿面冠者猿ゲ酌こそ相應しかまと笑ふと見て浅井長政遠方と眺と眄り御客小逆ふいと禮有り。時有小議らまとあるふ表右衛門心中小怒るとの〳〵ども顧と歎却して苦笑ひ〳〵市座小辺まべ嚴言御頭て逃ゲと捉怒〳〵。斯御叮嚀の御饗意小ま人も殆大慌あり小居こと貴の至りなぐら猿法猿筆つまり。御者と勧めんと戯まあぐら長政小献とまるぬらせり。信長こまと爲そしいさる藤吉郎ゲ酌ならば御亭主小も御盃と把さるふらめとあるとくるゆ〳〵長政も微〳〵と笑辞まるい蒲心なるい似ようと来盃辺沈清て帰時欣了くるゆ〳〵。本小崇祝の衣紋と結ひ領推把ち挙り会法更り情まある中の酒宴や」と声うち揚て謡ひるまべ長政ゆと〳〵笑いい小投。うち寛ひで興ドくる响信長も已〳〵と笑ひいるふ藤吉郎今日〳〵市嬢と備列長政を指〳〵遣り。態し

て紙での對面あるい猿、華いこまと忍びきめとと戯謔こ多〳〵長政も座中の興とそ笑猿ゆまと満座笑ひくるゆ〳〵ゲ賜〳〵げい見〳〵くるゆ〳〵。角家〳〵使節小出発。和田伊賀守こも迎り。義演よりも不興氣小ナるゆ〳〵しき御辺鎮ゆ。苟も彩公方家の御使と御使ともなりえゆ〳〵して。礼禮ゆ格の應對ゆ、ま乗帰ま怪と所とり信長熟ゲこそ予紙より義演ハこ好松永と同ゲ〳〵彩公方家ゲ御歌ゆらんと謂る翻の宴〳〵ゆらゲ。其儀ゆらば軍着小まづ豊国〳〵新て投。六角家ゲ遠代ゆ〳〵上洛の道もこ年〳〵ゆきそ。長政小も遠筋ゆまべ随分忠功と達こ多〳〵と紛ゆまあり。て謝禮と吉るい表ハけ〳〵成の表ゆ剣ゆり長政も御送こて函次と数小難国ゆ。君ゲ退迎こ小まこ信長小ハ柏原の成吉提院とゆ〳〵て猿館と色。浅井家ゲ〳〵の弟之人小ハ浅井縫殿助中島九郎次郎遠藤喜右衛門ゲ〳〵つけらまこ〳〵家も猶玄中小ゆ〳〵ぬるゲ信長度寛ざこ多ひ更興こまで酒宴ゆ。熟酔まゆと之吉右衛門

密に垣間見てうち驚び。佐和山をそハ幸長に渡さ。殘念ながら止まりしが此時こそ天の賜ふ
る時ぞ是幾くて信長と今青のうちに。殿捉どんがあるぶらぞと喜右衛門一人駿馬に鞭
うち。岩の城へ馳迎う。久政父子と勧めて曰。左右信長い表裏反覆の大將なり當家
とあぐく好と結び信と通ぜん緯出ぎつるなし。過世遂ぬ事に關り。後日歎せうなん緯ぞ。
謀のあきに似らずまつ對々の軍しそハ決ても信長に勝ぐし。今夜是今捉に出て喜右
と後し。熟醉せしに天淺井家に信佐ゝし出ひ濃尾國と駆ぐるなり。元僅に長
に軍を七百人附與しなへ苦もなく信長と殿捉のさん收所同心ゝ為せと
事せどく久政得心せず。信長既に軍懇切に信義とりて手をるといふ彩となせばとて。
熟辞の人の森蓋と制武士法に出るぞ。斬る事ぞ心頼に決て思案ぶらぞと嚴
しく誡めらるゝ。驕獣をなして退出し。程害心の止ぞして落び淺井掃部助と為の擢
らひ。自然ふ百人と出魏しく進を得めくせを捉て。晦を結るぞ去ぞ成長捉院

へ推進る。遠藤喜右衛門大に驚き。信長と今青の内に為ぞ
に。明天八濃列と新百るぞ。ぞ烈火の傍に馳ぞ。ぞの中軍に雷鳴時とぞも
驚り。疑惑八軍の病なり。意外怪と遠ぞ。喜右衛門と驚ぞ成長捉
院へ走らせぞ。刻陳さへあきに彼外候嘗く壹返りのぞくの勢ぞ為ねぞ。歳十
とも知ぞ。弛驚り成長捉院の四方と嚴しく囲と候ぞと告ると所く
遠藤喜右衛門空清て冷笑ひ。伝の象然ことのあるぞきぞやそなこの自軍のぞと
ぞ推進ると指揮ぞと。淺井掃部助に止め居く家に進ぞ事殆
発くおぞ。ぞり是ぞ獨形寺に西兄実ぞと。ぞ進退と案内ぞ
りに。表右衛門強に。もとおりひ馬の書と帛に色と成善捉院の遠色ぞ
居見まぞ。彩いぞ。候ぞ。調に。坐も違ぞ。旅當懸と箕ぞ四五千余
強ぞ。ぞ織田勝ぞ。ぞ伝に。兼燎と樊ぞ四方と囲ぞ。ぞ得の遠


信長成善
提院り
次宿する
に路
こえ


木下の
一炮忽地
万騎の
自方を招で
遠藤をして
驚怖うさむ

其二

藤堂とゐ。却て八傅えじと把て返。掃部の兵を退ぞ。そも〻平服ゐ
あらざめつ。仮宅あき体ゐいでこちて。寺中へ投らんとせる兵士籠城の兵士
傅こまを且名誉の深くるゐ何者ぞまべ。安宅門もなく通るゐやとゐ山を
右兵衛尉吾もなく。乃丈八遠藤右兵衛尉とゐふ。浅井御能者の侍人なるが。御
警衛の深ゐつひて。主人ゐ尋ぬる思枝ある由。甲斐ゐ兵ゐ帰り越。兵ゐ帰り
て偽あゐと言ふる。剛ゐ籠城の兵士さらば通しもいさんが誰らん認る人やあると
いふ声の下一個の兵士遠藤丈人ゐ相違なし。と譲ぞる也。所て通しぞり。喜右
衛門申まり。怪しまべ後時りて喜を和らげ者ゐ方ハいまの隙の侍士荒ゐて
ありつるぞと訊ねゐ兵士傅声を借ゐ。是ハ浅井の城を本ゐ郡の兵士ゐて。
蜂須賀彦右衛門とゐふ人の割合を守り。外面ゐ守護しあらせ
しが今宵八御思枝ありと郡首の暗号ゐ随ひ。郡ハ警衛いまとなりと所て

喜右衛門ハ我もうち折け。吁怨しや丈将の熟酔せしこそ丈援の胸と来て因まべ
居ゐ斬量忠義の心を傾け守護する事のあつるハ実ゐ丈成ゐ武将なり。
丈を我等ぞ分として謀りぞる事ハ果ゐまよと怪ゐ感じて急ち小谷のまと書心を
止めぞる。寄慢比寺へ蜂須賀彦右衛門の暗号ゐ知りて集りしハ本ゐ甲斐より遠藤が
拳止ゐ因を厲ぞりしが是ハ若武者の辞せらまし頃ぞる喜右衛門のまく湯結患ゐ知まざれ
べ徒事ゐ心と浅井家の侍士傅ゐ問部をべ遠藤一個馬ゐうち弦いつく也富て
や馳行。と言ふゐ備へと号輝を放ち蜂須賀彦右を集めしあり。右ゐ富家もれの
ぞの光て燈の光も怠ることろ。信長寺中を御起あり兵濃ゐ御馬を向させこゐ。
蜂須賀彦の一千余人前後を守護して列行く。信長ぞ三御覧あり。遠藤ぞ車ハ
いの向ゐ誰が指揮ゐて集りしと疑りぞゐ。ハ馬前の兵士是ハ本ゐ藤吉郎より頼て
東屋ら也偽とぞうて言へて通を急がせ事ゐ。波阜ゐ保城まじく早逃秀吉

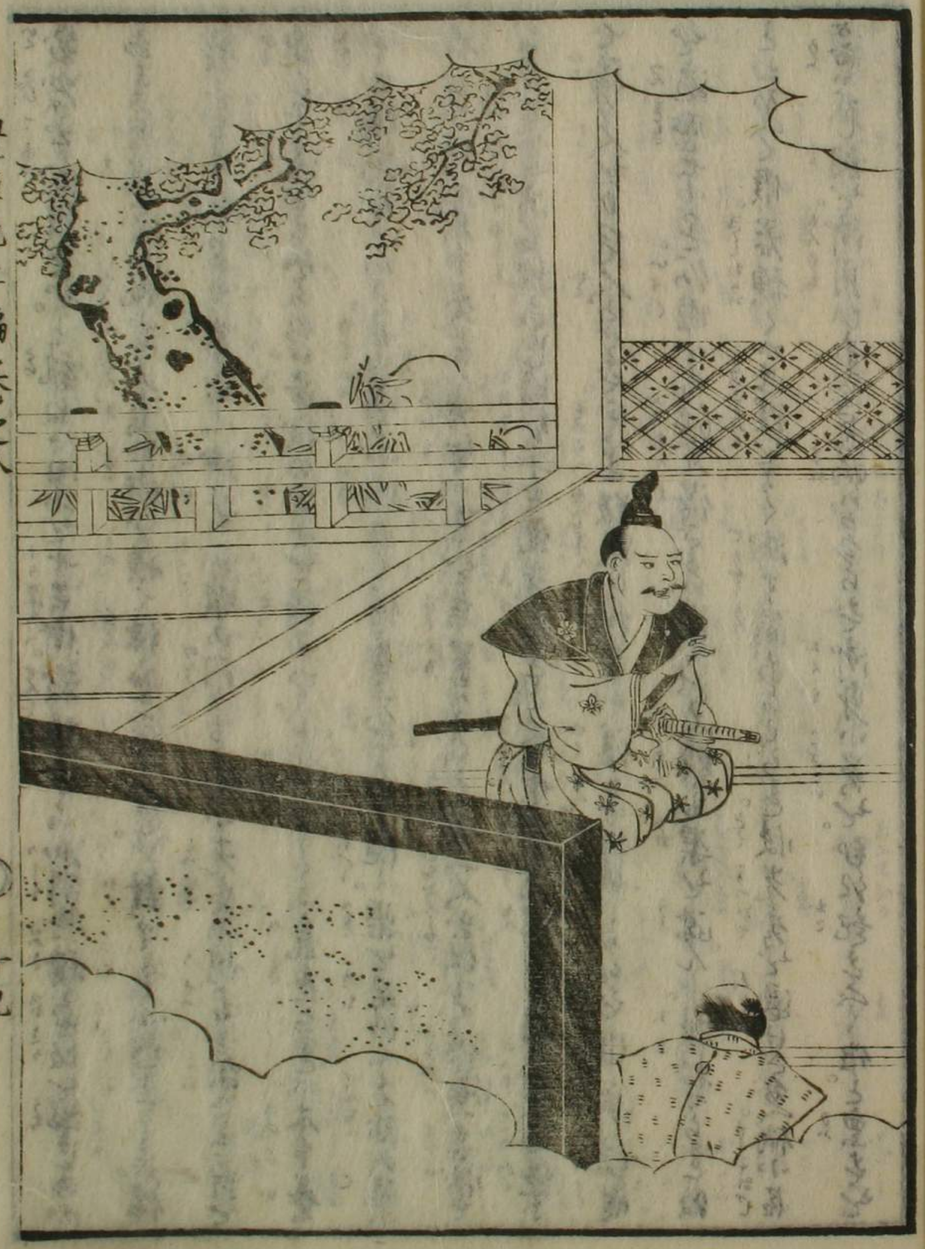
を始めさまざまの列の始末を御訊ねあるに佐和山城主遠藤が御酌に起こる噂の和作
雲心ありと聞くに依て御賢慮の如く概量らひ又相原の御旅館にても暗き事の
作出し隊伍の業と呼称め守護つかまつらせ候と申すに織田殿に対面ありて感に
入さるひ。藤吉郎が遠慮の量狭に頼母しく思ふ方一人随身せべいとある
屬に越くとも氣煩ひなくして悦び給ひぬ

木下昌朝明智光秀愁近君 屬源頼信長

こ慶五層の横閣も礎すせんばあらずと落ひ給ふに説参る明智十兵衛光秀と
そ貴君おがら扶身大事雲水とさるに後歴して終に将軍の任を棄つ殺に逆ある
者の大ひなる船。然るに信長に仕へ兼領の心を思そなひ最初に渠を伐滅し。
御上洛の道を開かんとて出陣の準備を終り給へ明智光
秀が書を命ぜられ開も遠者に越前に赴ふ事あり上洛の日に
魁軍に加へ忠義を尽せよと頼て納得せしめ給ふ。暁に至り自の近づきぬるを。苦
らるべきあるとも加隊てこび候と命ぜられ。信長謹で奉所。君の
為に忠を謂さんとて侍士に貴賤を問はず招寄る時節に候堪やや
諾意あり。仕へそのを申べき。然るがら其者に呉今いぐに作やと訊ねまゐらせを新
公方家に暮び人をせらまくるせう。原来明智十兵衛に當國累代の侍士なるこも
秋藤義龍に怨あるよう。物語ること有らし。定めて出陣の沙汰を聞に出る詞
あるべしと宣ふて止るが一日を過て伝。木下藤吉郎より言状して明智光秀と
京兆の奉公の暫こと作て参上のよしを稟し出こう開も此光秀。朝倉家の
縁を辞。謝辞を乞て来るが波阜に列りて嘆嘆を鶴が當時信長の家臣
中に木下藤吉郎とゆふ侍士に希代の英雄なる評に所出。まづ遠人とのうく
推挙を頼ふ前尾宜らんと木下が詳に言家臣を探出。枕おく人

と宣まふとかや。藤吉郎こまこと〻申揖對面をして人品を誤るかと言語應對常しら
ぬ器量骨法凡料あらねど。そこ〻意氣いかゝも穩やらねば。本下心かゝ寧からぬ心
うひ遠侍退帰さんと思ぜ〻ど侍姑し遠者の不思我をもとりてこう指こぞ。
かゝらぬ我とうれ度の家老柴田佐久間へ使ふべし。柴田係もまた我が熟類さも
んと心ぜそして戰りべし。然せんよりハ初中後ともかゝ咽をとりて畢らんと思
結〻喜上せ〻ゆう。信長こまを所しめ。そまこを頼て新公方家ゆう命を
ま〻者あまべ使昭出せと宣ふとう。藤吉郎のよく慮を。偖ハ我をよう推
拳せ〻こを藤あまを備地〻の家事虎より。攫摺得さをらんかかの事とや
微出さん樂が心度量ぐし。と心さらちかゝ思惟色し須て光秀を導きて古兄かゝ登
らきるかたをもち織田殿對面のうへ方方家ら代く當國の侍人なる上
事も疎くハ思ひやらぞこまを越前かゝ新公方家へ忠志を竭し。仕て無

神妙あり。遠遣所上洛の所事かつき。御勉軍小条ど忠戰ゆさし惟たべ奮く懸
賞を既行ん小条代先祖の面をも奥し。且子孫の後栄をも開きまを〻と懇切
小寵ふ〻こさまを光秀ハ先秀首を頓て対不肖小ハ惟得とも天下は御大事小
志加う。相應の忠を竭さん縛素ふりの本意小惟。小ハ當國を奔走つまつ
る。諸國を歴巡惟ども。然せる幸福もなく惟徒〻く年月を過をうち図ら
ず越前小才を行〻め。微の功勞あるをの〻莫大の恩を奉こまども。彼國の風
小て君臣とも自國をの〻閑〻と思ひ古条新条の為昇を謂を患をかと思ひ
もやらぞ。願ず上新公方家の御情をゆざし惟こと深く恐まへて惟也昇く
御暇を蒙ひまるらせ出國つまつり惟と。謹謝をりて言はせ〻べ信長小ち
存ぶくおぼしめ〻。扶持宛行ふ謂小ハあまど今ハ出陣の日も定り余日さへきき
事小〻あまべ驚く魁軍小加り。旧列へうち援。攘夷惟へ旦他國小て軍中へ



木下が遠慮
他年の後を
察して強く
光秀を推挙
なさしむ

幾度出合候ぞや。と訊ねる人に十兵衛。戰場とは加列の一揆壱揆を駆しのミ
なりとも得こそ風雲天氣の術を領て練磨つるまつりし。諸人に譚出るを。信
長ふも耳新らしく聞へ。御若殿様の門客もこれを小光秀が利口小部さまこれを
雖ども道とも知られぬ帝代の名士を得玉つりと其心ゝ〻る氣色なるまゝ本下意
中の機密をもつく。京濱ふ眼みく。信長の命ぞる隨く。渠を用ひて之謀の隙ふ
加へらる。信て本下秀吉ハ明智が事を系置ることを家一人を仕して。信長に言出を
らく。遠遣御召抱あり。明智十兵衛光秀と。器量骨法凡あらねど。渠が心能を
で繕り人をもつて人とせぞ。こゝ上級達の相あり。後年頼母〻〻ならぬ。偽闇諸國
を遍歴せ〻ら。仏國ふも治身得ざる。必ずや大將も渠を謀んど。技拙せらるゝ
とおもへて。若頼くハ必理をよく御ず簡あらせらるゝ。光秀を退けらるゝ。備小臣
が意せし詞を御用ひあらざる。嗚ゝあらぬ沖身ふ災を。知れ起るべく。作と意を

織田殿聞しめ。渠が偉ハ新公方家頼てより。信長ふ命置るし者なるべ芽を言
ぞる。知れ有り。渠を親しゝをつけぞ。謀せん律ハ安ふまぢ。退ぞんとなる。雖し。
且遠遣の出陣ハ義を。奉る新ふして一個ふもあるを。侍士を拳用めき時節
あり。今出陣の期ふ臨ゝ。光秀が如知勇士を得ざる。自軍の吉兆とりまべ。後日
い悪もあるまの社なハ。信長の心ふも任せぞし。新公方家の思召もうあるまべ。
陣ふ加へく攜らるべし。然とそれ又仏の故ふ後の患あるやいふぞ。縱令ば光秀異心を
懷き。謀叛あるべき事念あるとも。自方より重く仁慈を施し。扶助を加ふるのあらば。
悪人ふもあるまゝ。石あらぞ。渠ゞ〻ん。伏さ〻らんや。汝心労もべらるべと。余ふ本下前
根を奬め。遠遣御魁軍ふ加へ。ものべ隨ふ武功も顕るべし。然すとるこきんば品位ふ
よりて。恩賞ぞくわるべらるべ。賞孫原ふくあるふ隨ひ渠を退け玉ふ律。やりくりつく
ゆ〻ぐしまつる後患は譚とのふ。光秀何の筋ふ小心得ぬ詞の多く偽ることを

這遣軍師の指小用ひ給ふを深く喜び最強氣小見へて候。總て見る事
のおらひい功達て為うふて后賞こまこふ闘ふことて道なまこ無るものまぐす功
名小君の評さもこあふ小もせよこまを心小能る縁なきこまを小臣が見を屬るの
身(あり。功なきを小そや賞を得て心意昂さと人を見て組候へば楽備功を達さ
まる胴君の恩分光秀が心小恨ざらんや小都て君をうらを参らを害心を蓋し
候らそん君小も渠が意の如く恩孫のこと い雖ろこ。備まこまを駆へるあそば
譜代古参の面々は恨を醸し候ひそん。こまをそ當家小なりひ設けぬ笑の種
とうるるう。家後彼者のおけまばこて。君は徐先とうもせを。見又渠を加へうとそ。
君の御威光燈りもを(を)小臣嶽山小外へぬるが。光秀先年を利小なのて奉
公をこを望をしのども。元能渠を見て臣相のあるをもて用賦を駆つ速
小領地を追出候とうや。備まこ朝倉が恩分も。強き孫少いあらざりしを忘れの

便おこをこて退身せこと小何乃きり。是をもて推胴ハ君は恩義を思ふことをく
唯身のさめを考らをし心宛も虎狼小近し。然る御思慮ましまてこと最深
切小諫訴くるこハ信長熟くきをしめ。汝が諫ハ決して忘まこで胸小懐で寄を
きが新公家が命せこ。諫もこまをるつく。亦雖されば諫て定めこ軍配の如く
閣もをうること。明智光秀を信小出陣をこを辞さをけれ

織田六角名々評定軍議 屬本牛高論

織田敬小い沉刑を打破。新公家御上洛の路を開んこて美濃尾張こ
沉小伊勢の軍を催促。四方八方皆余人番刑相見ゆしを。永禄十年九月
七日出陣ありと徇をひ信長立正寺小参上ありて新公家の御氣色を伺
をまこ今日まを御歓退治のさめ小出陣つるまる不日大を吹拍げ速小御逐

奉らん其胸をあく御出馬候らへ。最已十日ハ過さらんと言ハしこそまつれば。
新公方家の御表悦ばるゝ。さて行列を御覧ぜんとて。遠沢ハ出陣し
こゝひろ。ハのさ四方ハ鳴弾し。織田信長の陣列ハ五ぶ隊伍整こと引ハ
を挑さぞ。諸旗翻こして天と舞ひ人馬ハ驍勇ハして凛々山嶽こゝ瓜見へ
四色を拝て見へ。ふるゝ。新公方家も頼くおぼしめしつゝ方位ハ南ハ御覧へぜ
らて出軍の行粧のまさりしを御心寛くおぼしめさゝ近侍伺候の面々もいよく情
のく思ひ。意織田殿の発軍の見へ盛しさと感歎の声。雷鳴時ハ鳴も羅ざり
ゝて先陣ハ列相ハ出ゝ港列の蜜井赤坂ハ出ゝ。大将
その次ハ成善提院ハ一宿まゝ。翌天八日ハ近江ゝ佐和山城ハ着至ハ浅井
長政も遠雷まで出迎ひ。江南諸城の関行等。ゝ相談色し玉ひ紫書
逗留あり。姑く人馬を休ゝ。ゝ然ハ当国観音寺山城中ハ

角弾正少弼義賢入道兼禎。および右中将佐義弼。江南の諸士を呼集めゝ。信
長使者をさし越。新公方家の御将佐ハ馳参ゆう。御上洛の御魁をつゝまつる
べ。ゝ。を惠しゝ。我新公方家の當國尚家ハ。ゝまゝ演ゝ。系都新将軍の
御種をふゝて是を害せんとせしのを今更信長ハ聴しゝ。所容ゝく将佐ハ
参り。織田の指揮を受んこと思ひ絶ゝ事ゝ。先日信長の使者ハ逢ゝ。
侯ハ追返しゝり。定て信長軍兵を繁し。進発ゝん事必定ゝ。防御ハの準備
をゝんハ。ゝ。敵も敢ハ。彼信長ハ美濃尾張勢小参西の軍士を
帥ひ攻登る風説のまゝ。定て雲霞の係ゝ。ゝん上新公方家とも奥。故
将軍の御為ハ。二好松永を伐滅し母君慶寿院殿兄君義輝将軍の御仇を報ゆゝ義兵の
発軍ゝ。當家ハ都の留守将軍義栄公江御為ハこを防ぐ軍ゝ。謂ゝ双方牛
角ゝまゝ。ゝ。ハ濃ハ。ゝ。と新公方家ハ出家遁世の御身ゝ。私ハ選作ゝ。

かけ合くも將軍の職を傾けんとせしを雖ども無力なるべき。信長鄙夷ふ生長く。都の事を知らざる田舎顧風の君を擁擁ゆらめ教他這國ふも。信長心地を通ずる族あるべ。是まで爾新をづらを。遠遣の防禦ふ自國の安全。且ハ京都の將軍家へ忠勤を尽さんとの軍のまゝ父子粉骨碎身して短命重義を捨ずふ。よく防戰をひこなべし。忠功あらば指別の御感賞ハ奉得さもん。偏東魏練の羽止せば見まく罪科あるべ。死ぬと利害を思して平知ありしかいまも畏をたてまつると異口同声ふ言さう兼復又子ことを所て。然ハ防禦の方術を語らん。門々歸関至へまづ和田山ふ要害を構へ精兵勝て嶽守おくべし。彼地ハ衛道ふ近れば信長の軍を通らんずる脇。無二を之ふ却て參一揆ゆりのゆらハ尾張の武者軍百臂を振ども容易通り得つらむ。左右もる間ふ當城篭作二隊の軍勢を推發し。織田を拔て戰ども敵を微塵ふ合さん事。箱裡の亂を擒ふ奇。彩ハ能

ども乘さましく思ふ遠義ふ同じくう。然ハ伍部をゆべしてまづ篭作の城將ふハ吉田出雲守を頼うとして今ぐく彩助。建部源八長泥集人信田盛物。こまらの勇士ふ千人余の精兵をもてして對嶽守らせ。次ふ和田山の要害ふ。山中山城守田中治部大浦。遠両將ふ二千余人撰ふ擇てそれを守らせ。日又目野の城中ふ蒲生下野守奥秀人道收幹嬬る右を清左貫秀。八百余張ふて捕ゆ。乾るまつさ守山ふて城門ふ種村大藏大輔。上坂主馬助一千余張ふて牢居せり。水に城ふを進藤山城守。建部兼女正一千九百有余人石部の城ふハ伊賀出羽守。里見内蔵助一千余人續て草津の砦ふ。馬淵治部大浦。國藤右兵衛七百余人を城ふを長光寺の砦ふ上坂兵庫助。後藤伯八郎一千余張ふて固めさせ。其外ふ水原橋詰の門ふ。西近江ふ宮佐山城。田言湾の城ふ。區ふ防禦の方術ふ訪け。都て惣城十八箇所ふ双の湖水を中ふ。し一張當千の勇

織田勢
大軍を
江川に
進めて
陣を殊に
糧炊を
盛んに

士達ぶ数十万に数と知らざいうべく大軍進まざるべて帰る事のあるべきかと勢威暴て待蒐さう然れども信長は佐和山城中小高日ヶ谷と人馬休息なさしめ至て諸所城攻の分撰定して今ごく十一日佐和山を出張せらるる高宮の二住小陣を移しこと四信を放火して自軍の軍威を示しく然して敵の虚実を量る小に角宮小も頼くとう覚語をしうる事なれば其作和田山両城を知分別とこそ固めさるべ容易寄ても出ざるさるあり然て陽傍の小城なるとを佐藤兼ても置ざし宮僅番首小攻るの城は。いづれとうろ出んかせざやとこを知れ越智川小陣を移り評議の場小諸士を集め信長面こ小宣ふ。和田山を佐親善寺と興のこと是小比をといへども親善寺は根本小して和田を作は捨城なり。彼本城を隔しるべ捨はなのつと嘲るべきかまづ観音寺へむらえん小やと命せもいまざ果らぬ小柴田勝家進出君の御計慮を察まし本を絶来を拾を

の麓小合を遠先陣小居小命ぜらまを賜えるべし。攻うち起んと殘むを見て。本小藤吉郎実と進を統兵んで言出さらく。斯小勿論の御諸ゝの丹もうの筆佐和田山小自軍の御陣小近くして。然も観善寺山を船助んさの勇見小築きし捨城なり。西の二箇所をとうち寄て。奥の本城を攻る駒後なる筆作和田山より厳援をなして斬て出るべ自軍ゝ後を提断きて軍顔る勢先をらん観音寺山の本城小居らびく怒向して地理も見識て佐が爾分堅固の要塞なるべ自軍いろはど猛くとも力攻小成ざるべし。殊小新公方家御奏首の軍なるべ捨城小まるを結小易ふ就て一城を遂く陥しさらん小自軍いこまを小勇気を懐し敵小況気を折くべし。懐める自軍往威気をもつて折ける敵小向ひるべ小日小落去つるまらん。捨城悪く陥ての治いうある堅固の要塞小もせ。本城をとろ抵抗さるべ終小陥ずりさべ。遠理をもつて見る嘲ら

を以其作和田山を攻させらるべと諫めるに勝家活と怒実をし謂ひ水やいふ
堅固の本城ふもせよ織田の勇士俗務骨しそ歩破る事のくちらんやよんべ梢城
より援兵ともあまた又俗量のことあらん縱令其作和田山を攻るべそ他城
よりも援兵進合さべきを拒拠ふらやあらふぞ同じくいまづ根城をせ兵揚き。
兵地ゆるこそ意地よりきもれ大丈夫の石部ありと驕出ふ罵しまべ赤やこまと
靡宵め。その大勇ハ然ことあるら。古城ハ累代の修築ふして要害最も考備ふ
まこも。余ハ梢城ハ一時の修理ゆ。堞石垣も整そ。こまとりて攻るふ易し。
又本城ハ敵の進ると見るるらバ國中挙て援兵ともべ。其作和田山ハ敵進る
こも遠く防禦の虎口を守りたる事ゆるまバ他城ハ加勢ハ出ともべらるぞ自國
の援ふ援つくこまらの事も知ぬさまと侵ふ口論ハ毒殺ふ小臣ハ隙の兵を効
く今宵中ふ和田山を系提聖嘗天ふ軍を始じゆ其作を攻ふ依りふもべ。主

後事城を攻るとも。余の梢城をうち破りて直地ふ都ハ推進ることも時の問題ふ
なしるるべと言ふ。ふ推ふうち發き。軍中ふ妄言ふし。無バ見不の一隊をとりて。
今宵中ふ和田山を系提べき事ハ實ゆる歟。倘ほと攻て強得ぞんべこまと
ちんとせらるべ。其事傳跡忽ゆ。怪ほるるべと禁止ゆる。秀吉詞を発く。
みふとて安言をとりふべき。今宵中とのハ獨ゆし實ハ世ほり卯の刻ほるべふ
攻ふ〜言ふべ〜ふ臣ふ認相違せバ。再び軍法ふ加えるまじ又いのあるゆる軍令
ふもあまた耳んじて奉作ちんこやその時刻も近づるこまべ歩部んこそ言へ
ける